慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宇野弘蔵著 経済学の方法 （経済学ゼミナール（１））
Sub Title	
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.8 (1963. 8) ,p.786(102)- 787(103)
JaLC DOI	10.14991/001.19630801-0102
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630801-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宇野弘蔵著

『経済学の方法』

（経済学ゼミナール(1)）

さきに宇野弘蔵氏は、『経済学方法論』（一九六二年、東大出版会）において、永年にわたる氏の経済学研究のうちから得られた方法論的な成果を公けにされた。それ以前から、氏の方法論に対しては多くの論議が重ねられてきただけに、非常な興味と関心とをもって迎えられたことは確かである。その後の論評においてあきらかにされた如く、いまだに多くの納得しがたい点（乃至は、根本的に立脚点を異にする点）を残しているということも否定しえない事実である。ともかく『方法論』が卒直に、他からの批判点にこだわるところなく、氏の見解を明らかにしたのに反して、本書は最近数年間に氏の経済学方法論に寄せられた主たる批判をとりあげ、それに論評を加えるという体裁をとっている。従って、総じて、方法論という見地からどこがどう対立しているのかは、『方法論』よりも一層明白に看取しうるであろう。

ゼミナール形式で展開される本書が、宇野氏に対する主たる批判として取りあげているものは、遊部久蔵氏と、佐藤金三郎氏とのそれである。おそらく、遊部・佐藤両氏の宇野氏への批判が、方法論に関する最近の有力な批判であることからすれば当然のことといえよう。いまここで、批判と反批判との詳細については、本書自体の内容に譲るほかはないが、本書の内容を大別すると、(一)いわゆる「三段階論」について。(二)マルクス経済学と近代経済学。(三)「価値法則」を中心とした経済法則の存在と論証、及び商品論の意義について、という三つになるであろう。

(一)においては、遊部氏の「プラン」解釈を中心としての宇野氏への批判。さらに遊部氏の見解をもふまえて独占段階の理論的研究を中心として原理論・段階論の関連に疑問を提起した佐藤氏の批判に応えるという形がとられている。とくに中心論点はないが、注目されるのは、段階論的見地からみた産業資本と原理論の展開基盤たる産業資本とを区別されようとする点であろう。ここでは原理論における純化と、段階論における産業資本段階から金融資本段階への転化のさいの外部的要因の重要性を対称し、段階論と原理論とが一義的につながるものでないことを強調されている。(二)においては、遊部氏が強調されるマルクス経済学と近代経済学との「対立」という点をとりあげられる。遊部氏らが、近代経済学批判をつうじて経済理論の科学性や、その「原理の基盤、性格、限度」があきらかになるというに対して、宇野氏は、マルクス経済学の原理そのものの基盤、性格、限度をあきらかにすることこそ、（とくに独占理論をどう取扱うかに関連して）「科学的」たる前提だとされる。さらにこの点から、原理と政策との関連、原理と実践との関連について、独自の「現状分析」論がのべられ、さらに経済学史の役割が、「原理」の成立、純化過程をあきらかにするにすぎないという見解をとられ、遊部氏の独立の科学としての経済学史という考え方を批判されている。

(三)は、本書、いな、宇野氏の経済学方法論の総体的に示す最も重要な論点に関連している。とくに、「原理論」がとりあげる「法則」の論証という点に中心が置かれ、とりわけ、価値法則の問題が前面に出されている。この点は、『資本論』における商品論（労働価値説）の論証という、経済理論中最も論争的問題にかかわる。ここで、またしても遊部氏が批判の矢表にたたされる。遊部氏が近年強調されている価値法則の「存在過程」と「認識過程」との区別という点から出発する。宇野氏は、遊部氏の主張が結局のところ「単純商品説」（商品経済史観）に帰着するものとし、むしろそれに反して、経済学（原理論）の対象の「存在」自体に注目しなければならないとする。いわゆる単純商品説が、資本主義的生産を商品生産のうちから生れたものとして説くこととなり、いわゆる「原蓄」の意義、ことに経済法則論証という面からの意義が滅却されると批判される。例えば、「単純商品経済からそれ自身で資本主義が出てきたんじゃなくて、封建社会のなかへ滲透した商品経済から資本主義が出てきたというとき、分解は商品経済に行われるのでなくて封建社会に行われ、それによって商品経済が資本主義として新たなる社会関係、生産関係を展開する。なにも原始的蓄積を過大に評価しているわけではない。むしろそれを無視して商品経済の発達から当然資本主義が出るというほうが、おかしい」。（一〇八頁。）

さて、以上で本書の大要を示したが、宇野氏の方法論は、方法論にありがちな抽象性がない。それは『方法論』においても、本書においても、氏がつねに経済理論を具体的に検討するうちに独自の方法が生かされているからであろうし、たとえ批判の余地があろうとも「科学的」たらんとしているからであろう。そうした点はわれわれの学びとるべきことであるかもしれない。だがそのような方法論に立脚して出てきたものが、「マルクス経済学」ではなく、まさに「宇野経済学」だということをも感じないわけにはゆかない。かかる現状に直面して、真に社会科学の方法たるべきものが何んであるかをあらためて個々の研究分野での共通の問題意識にすることなくして、経済学の領域での本書に示されたような対立を克服する道はないであろう。それは、体制認識の基礎科学としてもつ経済学の意義をあらためて問うことであろう。（法政大学出版局・一九六三年五月刊・B6・一二一頁・二三〇円）　―飯田裕康―

新刊紹介

高橋哲夫著

『安積開拓史』

――ある偉大な遺産――

従来、近代史ないしは賃労働史において、個別的な部門研究、特に職人層や士族層の分解、再編成をめぐる研究は看過されがちであった。本書は、このような空白をうめるものとして明治初年の士族授産の過程ですすめられた福島県安積（あさか）地方における士族中心の開拓事業を解明したものである。

封建制度の崩壊と新政府の出現により、族制整理、禄制改革さらに禄制廃止の遂行と、同時に士族の特権を否定する職業の自由や徴兵制など近代化への変革が推進される中で、士族層は分解し零落してゆくが、他方で困窮士族に職を与えて新政府に対する反抗をそらし、さらに殖産興業政策の観点ともあわせて士族授産事業が実施される必要がでてくる。そして、この過程で士族層の一部はインテリゲンチャないしは新時代のエリートになり、他の一部は賃労働者化されて不熟練労働力を主体とする賃金労働者となり、またある一部